

音楽的知覚に関する研究 (Ⅶ)

——色聴所有者の人となりと反応の分析——

古 矢 千 雪

Studies in Musical Perception (Ⅶ)

——Analysis of Response and Character of Color Hearer——

Chiyuki FURUYA

色聴反応の現われ方と、色聴反応をもつ人物の特性を把握するため、前回(1984)は2人の被験者について報告したが、本研究はその継続的研究である¹⁾。

前回の被験者 T. Y., T. M. を各々 Case A, Case B としたので、今回の被験者 N. I. はその続きとして Case C とし、共通してみられる特色や人となりを明らかにする。また過去の研究との比較検討等も試みる。

方 法

1. 被 験 者

Case C: N. I. 20才 女子短大生

2. 色聴実験の音楽刺激

レスピーギ：ローマの松（はじめの部分）

喜 多 郎：シルクロード

ラ ベ ル：水の戯れ

松山 千春：朝日、風、雨、私をみつめて、愛、思
い出、My life、落日

単音の刺激として、モンテソーリ感覚教具のベル
音楽はテープに録音されたものを、ステレオ・テー
プレコーダーで再生した。音量は被験者の好みに合わ
せて調整した。

3. 生 育 史

個人面接を実施し、特に乳・幼児期から児童期にか
けての情緒的体験に注目しながら記録した。さらに、
色聴体験の記憶を想起させた。

4. 性格検査

前回と同様、ロールシャッハ・テスト、MMPI、Y-
G 検査を実施した。さらに不安傾向を測定するため、
MAS, CAS, GAT を加えた。

5. 色聴実験・面接・性格検査ともに、筆者の研究

室において実施された。被験者は日頃研究室に出入り
しており、いずれもリラックスした状態で行われたも
のと思われる。特に色聴実験は被験者の精神状態が安
定し、音楽を受け入れられる時を選んで実施された。
自由な姿勢で目を閉じた状態でを行い、音楽が終了した
後、内省報告を求めた。

結 果 と 考 察

1. 色聴反応の内容

ローマの松：以前の実験では、黄色と赤色が波うっ
て流れていくと報告したが、今回の実験では、何も見
えないと答えた。

シルク・ロード：筆者がシンセサイザーの音だと説
明した後聞かせた。その為被験者は、シンセサイザー
の音そのものに注目したので色聴はなかったと報告し
た。

水の戯れ：すき通った感じの曲だ。……胸がドキド
キしてくる。普通よりドキドキしている。胸の方へす
ごく血が流れていく。……透明な水色みたいな色。と
にかく透明。遠くに、うす暗い所に、人はいないけど、
遠くに光がある。届きそうもない遠い所から光がさし
ている。高い音がするとみえる。

朝日：奈良の修学旅行の時に見た柳生街道、1枚の
写真のように見える。明るい朝で、日がさしている。

風：暗い雨雲、厚い雲がゆっくり動いている。自分
のすぐ身近にあるという感じで、ゆっくり動いている。

雨：赤い長ぐつをはいた女の子がいる。

私をみつめて：机の上にコップがあり、水が入って
いて、すき透っていて、……コップを見ている 自分も
見える。

愛：アンティーク・ドールが見える。暗い棚の上においてある。

思い出：雨雲がもくもくわいている。不気味な感じだ。曲のほんの始めの方だけ。

My life：秋の刈入れの色。広々とした所を見ている。北海道か……、夕暮かな。

落日：牧場、海の所まで突き出た牧場。牧場のすぐ下に海がある。

単音の刺激：何も見えない。

個々の音に対する色聴反応はなかったが、音楽に対する反応はあった。しかし、音楽刺激があれば、それに対応する反応が必ず生起するものではなく、被験者の主体的要因が影響力をもっており、この点は、前回の被験者である Case A, B と同様であった。

2. 色聴の現われ方

音楽をきいていても、音そのものに注目していると何も見えない。また音楽をきいて、単に楽しむのが普通である。しかし時に、絵ハガキを見るように、ある場面を見ることがある。

心に強く印象づけられるような曲の場合だと思う。どちらかといえば、自分の好きな曲の場合によく見えるし、鮮かに記憶に残る。鮮かに記憶された場面は、その音楽をきくと正確に再生される。

過去の色聴体験は、ときかれるとすぐ思い出すのは、小学校の低学年頃、ラジオから流れてきた暗い感じの曲（だと思うが……）をきいた時、当時の自分が理解していた地獄の場面を見たことと、中学生の時、音楽の時間にきいた魔王の曲で、歌詞にあるように、暗い中を子どもを背おって走る姿を見たことである。イメージではなかったか、といわれると否定しにくい。イメージにしては、あまりにもありありと記憶に残っている。見たのだと思う。

音楽をきいている時、いろいろなイメージがわくことはもちろんであるが、全くイメージも何も浮かばないことも多い。イメージか実際に見たかの違いは、自分では区別しているつもりだが、実際に見たという現象が、自分にとって特別なことではなかったようで、強い印象がなく、したがって記憶にあまり残らないのだと思う。最近になって色聴の話を書き、自分の体験を再認識した。また、同じ曲をきいても色聴体験のある時とない時がある。その時の心の状態によるのかと思われるが、おちつかない時は色聴はない。

今回の被験者も前回の Case A, B と同様、イメージと色聴は区別できていると思われる。また色聴反応の生起には、刺激となる音楽に対して、どう心が動くかといった、認知する側の主体的要因が作用しているのである。

そして見え方は、目を閉じているので何も見えないはずなのに、色や形、ある具体的な場面、動きが見えているわけで、心の中で見ているような感じ、あるいは、頭の中にうかぶ視覚的記憶のような感じだ、という表現をしている。

視覚的な記憶といえば、古くから問題にされている直観像という現象があるが、今回の被験者の報告を検討すると、過去の視覚的記憶が、音楽の刺激を引き金として、鮮かに再生されたのではないかと考えられる点もある。直観像は、イェンシュによれば、感覚とイメージとの中間位置を占める現象で、視覚の対象が現存しないにもかかわらず、生理的残像と同じように、文字通りの意味で見られる現象である²⁾。普通、イメージは見られうるものではないが、直観像は、それが実際に見られうるのである。色聴現象を、この直観像と同様のものと考えてよいのであろうか。

現われる色彩や物体は、実際に目で見える場合と同様の見え方をする場合もあれば、一枚の絵ハガキを見ているような場合もあるようだ。この点は前回の被験者と同様であるが、今回の Case C にみられた特色は、水が入っているコップを見ているが、コップを見ている自分の姿も見えている、と報告しているように、普通の視覚とは異なる見え方をした点である。このような見え方は、前回報告した中で紹介した、内藤氏の例と一致した。色聴の場合のこのような見え方は、直観像の現われ方とは異なる点である。

筆者は、人の顔や事物等を思い出そうとする時、いわばイメージとして思い出すのが普通であるが、時にまるで心の中のスクリーンに、一瞬写し出されたかの如く、見えることがある。イメージが次第に固まって像を結ぶという感じではなく、どちらかといえば、イメージとして思い出せない時や言語的に表現できない場合に、ふと見えることがある。色聴を、このような視覚的記憶の再生と考えて、説明がつく部分もある。前回の Case B が、消防車のサイレンの音をきくと、目の前がパッと赤くなる、というのも視覚的記憶の再生であり、再生のキーとして音があるといえる。

視覚的記憶と色聴との関係については、今後検討したいと思う。

3. 生育史

彼女が生れた時、父・母・小学2年生の兄がいた。現在地の近くで生れ、生活環境は現在まで変らない。

幼稚園の頃、母と兄が中心となり、被験者を主人公とした紙芝居を作ってよく見せてくれた。ストーリーは日常生活のお話だった。市販のレコードのついた紙芝居も見せてくれた。ダンボは自分でもよく見ていた。本もよく読んでもらい、覚えては、自分がその本を近所の人に見せて読んでいたようだ。好きな絵（マンガ風）もあり、今も記憶している。

幼稚園頃から小学校低学年まで、近所に一緒に遊ぶ相手がいないので、家でよく遊んでいた。洋裁や編み物をしていた母親のそばで、よく絵を書いていた。ひとくぎりつくと、母親は散歩につれて行ってくれ、その時には歌をうたってくれた。

小学校高学年では、伝記ものや遺跡の発掘などの物語をよく読んでいた。これらの本は兄のもので、多分小さい頃、兄の本を読んでもらっていたのではないかと思う。現在もこのような傾向の本が好きで、よく読んでいる。当時、大きくなったら考古学の方に進みたいと思っていた。

幼稚園の頃、ピアノやオルガンを弾いていた。兄がフォーク・ギターを習っていたので、小学校3年の頃からギターの音をきいていた記憶がある。自分もまねをしてギターを弾き始めた。ポピュラーの曲が主で、普段耳にする音楽もポピュラーが多い。

学校の音楽の時間は好きではなかった。しかし音を出すことは好きだったので、鼓笛隊でアコーディオンを弾いていた。

中学校の時は、バレー・ボールのクラブに熱中していて、あまり音楽との接触はなかったが、家では兄がポピュラーな曲をよく弾いたり、聞いたりしていたので、自分も耳にしていた。

高校になるとピアノを習いはじめ、ギターも弾き、現在に至っている。

本を読むことも、音楽に関しても、兄の影響が強いと思う。兄は自分をよくかわいがってくれたし、今もそうである。

絵を書くのは好きで、高校では美術部に所属していた。写生が好きで、現在もそうである。イメージ画を描きたいのだが、描こうと思うとうまくイメージがつかめないので、描けない。

小さい頃は楽しかった、という思いがある。

前回の Case A, B には、小学校の頃から多くの本を読み、しかもその物語の中にとけ込むような体験をもち、今なお本を読むと現実を忘れ、物語の世界に入りこめる、そして心の安らぎを覚えるという共通性があった。何か現実不安があり、そのため、心の安らぎを別の内的世界に求めたと考えられる。

今回の Case C は、幼少期より家族の愛情を十分にうけ、豊かな情緒体験を得たと思われるので、Case A, B のように、不安からのがれるためかのように、物語の世界に没入したとは考えられない。しかし、幼少時の快的体験は、今でも心のよりどころになっていることは事実である。

幼少時の聴覚的体験や視覚的体験が豊富であり、しかもそれらが快的であれば、強い感受性や豊かな想像力を形成し、現在も心のよりどころや安らぎの場になると考えられる。Case A・B・C の3者とも、この点では共通する。

4. 性格検査

1) ロールシャッハ・テスト

集団検査は1度うけているが、個人検査は今回がはじめてである。通常のインストラクションにより、10枚のカード全てに反応が生じた。楽しみながら反応しているように思えた。

Total 反応数=81, 平均 R. T.=2'05", 平均 R₁. T.=0.04"であった。反応領域は W, D, d, S の全てにわたっていた。反応決定因は運動・色彩・形態・陰影などさまざまであり、なぜそうみえるかの質問に対する答え方も Case A・B と同様であった。すなわち、「パッとみるとそう見えるから……」と主観的であることが多く、筆者への説明のため、例えばこれが足、これが頭、と補足する。そのため反応決定因として、Fと判定する反応が多くなった。

自由反応段階の反応と、吟味段階での説明を整理して次に記す。

カード I

- 9" △ ガミたい。全体としてみて、……下の方は関係ないかな。形としてガ。(W, F)
- △ くわがた。頭の形が。(d, F)
- △ 遠くから見ると鬼の面。全体としてみて。目やキバがあるからお面。(W, F)
- ▽ 意地悪そうな魔法使いのおばあさん。絵本に出てくる。これが目、口、鼻。(D, H)

カード II

- 1" △ 人, 男の人。この小さい点が目。これが口。
(S, F)
- △ ちょう。下の赤い所。形がちょう。(D, F)
- △ ねこが向いあって手をあわせている。黒い
所だけ。ねこと言ったが, うさぎか小ぐま
か小さい動物。(D, FM)
- △ 白い鳥がとんでいるのを上から見ている感
じ。中の白い所。首が長いから白鳥。形。
色もかな。(S, FM)
- > 曲芸しているオットセイ。赤い所。形から。
(d, FM)
- 1'14"

カード III

- 1" △ ちょうちょ。赤い所。形。(d, F)
- △ スマートな感じの人間。黒い土人の女かな。
胸があるから女の人。(D, F)
- △ 火の玉。色から。(d, CF)
- △ ブタのひづめ。(d, F)
- ▽ 全体でカニ。パッとみるとそうみえる。
(W, F)
- △ つぼ。外のりんかく線。赤いリボンもつい
ている。ポイント柄になっている。(W, F)
- ▽ 大きなくも。仮面ライダーに出てくる。こ
れが目, 手。(D, F)
- ▽ ここがきつね。これが口。(d, F)
- 1'29"

カード IV

- 1" △ ねずみの頭, あるいは全身。とにかく上か
らみたねずみ。(W, F)
- ▽ 黒いこうもり。(d, FC)
- < おばけみたいな大男。下から見上げた形。
下が足。(W, F)
- ▽ シャコエビの頭。形がそう。(D, F)
- △ 耳。誇張されている。(d, F)
- △ たぬきの顔。(d, F)
- △ 犬の顔。ディズニーのマンガに出てくる犬
の顔。(D, F)
- > 体そうしている人。体をまげている。
(d, M)
- △ 花の一部分。形が花。(d, F)
- ▽ たてがみをなびかせた馬。きんぴかの馬。
顔と胴と手。(d, FM)
- > ワニ。(d, F)

> ヘビ。(d, F)

1'38"

カード V

- 1" △ ちょうちょ。はぬがあるし, 全体として。
(W, F)
- △ 白鳥。あひるかもしれない。(W, F)
- > ガ。全体の形。(W, F)
- < ここ, ワニの口。(d, F)
- 1'12"

カード VI

- 4" △ きつね。上からみた形で, ひげ, 頭の毛。
(D, F)
- △ 毛皮をひろげた敷物。フワフワした。
(W, Fc)
- ▽ 花。赤っぱい感じの花。下は葉っぱになる
感じ。(W, F)
- ▽ てんぐ。鼻, 目がある。(D, F)
- ▽ 昆虫の頭。形もそうだし, 色も黒いから。
(d, FC)
- 1'30"

カード VII

- 4" △ うさぎがはねている。(D, FM)
- △ キュービット。ほりの深い顔からそう思う。
(D, F)
- ▽ 向いあったうさぎ。目, しっぽ。(D, F)
- > そっぽむいたうさぎ。あちこちうさぎが,
いっぱいいる。(D, F)
- > 手羽のからあげ。ぎざぎざした形から。
(d, F)
- 1'51"

カード VIII

- 3" △ いのしし。赤いから強そう。(D, F)
- △ あやめの花だけ。色がそう。(D, CF)
- △ きつねの顔。青の部分の中。(D, F)
- △ わしのような大きな羽根。(D, F)
- △ わしの細い足が切りかぶにとまって, えも
のを見ている。(D, F)
- △ きつね。(D, F)
- ▽ かえるの顔。これがかえるの足で。手をま
げている。(d, F)
- ▽ かえるが泳いでいる。足をのばして。
(D, FM)
- < 強い動物が山肌を登っている。ほこらしそ
うにしている。(D, FM)

- < これが山はだ。このへんの濃淡が。(D, Fc)
 △ 氷山。ゴツゴツした感じ。色がつめたい感じだから。(D, FC)
 3'00"

カード IX

- 15" △ 秋に咲く花。色がオレンジだから秋の花。
 (D, CF)
 √ そうの頭。これが耳で。(D, F)
 √ あやめ。すこしさがった感じだけど。赤いから花。これ茎。(D, CF)
 △ 馬のはな。ほら形が。鼻の穴。(D, F)
 > 全体の馬という感じ。前足をあげて、たてがみをなびかせ、ヒヒーンとないている。青い所。これが顔、胴体。(D, FM)
 △ かにの手。肉のいっぱいあるところ。色からかに。(d, CF)
 > アフリカの地図。形。(D, F)
 △ トンガリぼうしをかぶっている兵隊が、ラッパを吹いている。うしろからそれを火がてらしている。(D, M)
 △ ヤクルトミルミルの、まんが的な人の顔。これが目、鼻。(D, F)
 3'05"

カード X

- 5" △ 墓石。色も形も。灰色だし……。段々もついている。(D, FC)
 △ マンガに出ている意地悪虫 2 匹。目も意地悪そう。(D, F)
 √ 黄色の小鳥。色。(D, CF)
 △ さんご。形が。(D, F)
 △ 幼稚園の子が書きそうなあり。目と口と…青い所。(D, F)
 > かに。そう見える。(D, F)
 > 枝のうぐいす。(D, F)
 > 枝。うぐいすがとまりそうな枝。(d, F)
 √ ぼうおう。きれいな鳥。手塚おさむの絵。(D, F)
 √ 龍。下を見おろしている。日本の昔話に出てくる。(D, FM)
 √ パラシュートをつけた人が、ゆっくりと降りてきている。(d, M)
 > 水に浮いている水鳥。黄色いから。おしどりかな……。 (D, CF)
 √ 外国人の顔。やさしい顔。色がたくさんあ

るから王様。(DS, F)

- √ 猿が岩と岩との間から握手している。片手はバランスをとるため、少し上にあがっていて……。 (D, FM)
 √ 赤い所が岩。ここの感じが……。 (F, Fc)
 > 崖か岩みたい。さっきと同じ。(D, Fc)
 √ かもめ。うしろの白い所も含めて、遠くからあらわれている鳥。(ds, F)
 √ 一枚だけ枝についた葉っぱ。色。形も。
 (D, CF)

4'25"

反応決定因: $M=3, FM=10, F=52, Fc=4, FC=4, CF=8$ 。

上記の反応決定因は、一次的な決定因のみを分類したもので、副次的な決定因を加えると、FK が 3, FC が 2, CF が 1, Csym が 2, 各々増える。

$M < \Sigma C, FC < CF$ だが M もある, $M < FM$, 反応総数の割合からみて F が多い, Fc があるなどから、繊細さや敏感さをもち、子どもらしい生々とした情緒性がある。何か内的緊張とか固さをもっている。このような人格特性としてまとめられると思う。幼児期の体験の影響が現われていると思われる。

今回の被験者の反応も、前回の Case A, B と同様イメージ的な反応が多く、吟味段階で筆者に説明するため、これが頭、目、口などと言ったが、不十分な説明に終わっている。このような反応は、反応決定因: F として処理したが、形態水準を考えると不良である。しかし被験者自身は成績上位の学生であるので、イメージ的な反応としか考えられない。1つの特性なのであろうか。

Case A, B, C のロールシャッハ・テストの結果を比較すると、M の数は ΣC より多い場合も少ない場合もあったが、いずれも色彩に対する反応が多くみられ、 $FC < CF$ であった。また材質に対する反応もみられた。これらが 3 者に共通する特性といえよう。

この点が、色聴反応をもつものに共通していえる特性なのであろうか。

2) MMPI

$L=2, F=3, K=17$, データとして信頼性あり。

プロフィールコード: 5-42860

検査をうける際の防衛的な態度が強く出たのか、全体的に低得点となった。検査はリラックスしてうけているようにみられたが、固さの現われであらうか。

社会的活動を好む傾向や、スポーツ等に関心をもつ

傾向は、日常生活を観察しても明らかであった。

3) Y-G 検査

テストの結果を、D・C・I……Sの順に、傾向の強く現われたものを記述すると次のようになる。

抑うつ性小、神経質、客観的、協調的、攻撃的、のんき、思考的外向。(D'型)

Case A, B, C 共通にみられる特性はないが、一部似かよった傾向として、神経質・攻撃的・のんきの3つがあげられる。これらはロールシャッハ・テストでえられた結果をある程度支持している。

桜林(1983)の研究によれば、芸術活動をしている学生の性格を分類すると、作曲や美術専攻の創作活動をする学生の性格特性と、演奏活動をする学生の性格特性に分けられるという³⁾。創作活動型は、一般の学生に比べ、抑うつ性と気分の変化がより大で、神経質であり、従って情緒不安定に傾いている。また、主観的で攻撃的であり、従って社会的不適応の傾向がある。さらにのんきな面があり、また社会的外向である点で、主導的傾向をもつと考えられる。これに対し、演奏活動型は創作活動型に比べ、抑うつ性、気分の変化、劣等感が小で、神経質でなく、情緒的安定といえる。また客観的、協調的で社会的適応の傾向があり、活動的で思考的外向の面もある。社会的外向性が強く、主導的であると考えられる。

今回の Case A と C は、桜林の分類と比較すると、創作活動型の性格特性とかなり似た傾向がみられた。創作活動を行う者は、当然自分のもつイメージを具体化する思考過程をもっているし、過去にも、作曲家の中に色聴者がいる事実は周知のとおりである。

この創作活動型の性格傾向が、今後も他の色聴者にみられるかどうか、検討していきたい。

4) MAS (顕在性不安検査)

今回の被験者のみならず前回の2人についても、何か不安傾向があるように思われるので、不安検査を実施した。この MAS は、先の MMPI の結果から判定できるので、前回の2人についても報告する。

Case A: 不安得点37 (I 段階、高度の不安)

Case B: 不安得点33 (I 段階、高度の不安)

Case C: 不安得点21 (III 段階、通常域)

Case A・B は高い不安傾向をもっており、この点は前回の報告の中でも述べているように、1つの人格特性としてとらえられていた。

Case C は通常域には入っているが、その得点は限界に近いので、不安傾向なしとはいえない。

そこで重ねて次の GAT, CAS を実施した。

5) GAT (田研式・不安傾向診断検査)

各々の不安傾向偏差値を次に示す。

学習不安傾向: 5, 対人的不安傾向: 5,
孤独傾向: 4, 自罰傾向: 2,
過敏傾向: 5, 身体的徴候: 5,
恐怖傾向: 4, 衝動傾向: 3,
総不安傾向: 43

この検査からは不安傾向は発見できなかった。

6) CAS (不安診断検査)

各因子ごとの標準点を次に示す。

自我統御力欠除: 6, 自我の弱さ: 3,
パラノイド傾向: 5, 罪悪感: 5,
衝動の緊迫: 7
総合得点: 5

この結果から、衝動による緊迫状態が少しあることがいえる。欲求不満による緊張や、神経質傾向を表わしており、ロールシャッハ・テスト、Y-G 検査、MMPI の結果とも一致していた。

不安傾向ありとはいえないまでも、心の中に固さがあることは認められた。

今回分析された色聴反応を持つものとしての人となりとは、幼少期より心に強く印象をうける話・絵・音すなわち聴覚的体験や視覚的体験を十分しており、現在もこの幼少時の快い情緒体験、またあるいは不快な情緒体験が、心を強く支配するという人格特性としてとらえられた。

前回の報告では、成人した現在も、現実から逃避する場所として内的世界をもつという特性が明らかになったが、今回の被験者には、この点は確認できなかった。

さらに研究を重ね、色聴所有者の人となりを明らかにしていきたい。

要 約

1. 本研究は、色聴実験や面接・性格検査を実施し、色聴の現われ方や人格特性の分析を行い、前回の2人の被験者との共通点や、他の研究との関連について検討した。

2. 色聴の現われ方は、単音に対する反応はみられ

なかったが、音楽に対する反応はあった。

3. 色聴は刺激さえあれば反応が生じるものではなく、前回の被験者と同様、聞く側の心の問題が要因としてあった。

4. 色聴の考え方は、心の中にうつるものを感じている感じが、距離感や遠近感はある。今回の被験者は前回と異なり、普通の視覚や直観像をみるのとは違う見え方をしている。あるものを見ている自分も見えるのである。

5. 生育史や人格検査から、幼少時に豊かな情緒体験をもち、その体験が今も心を強く支配する傾向があること、繊細さや敏感さをもつこと、心に少し固さ・不安をもつことなどが明らかになった。これらの点は

前回の被験者と共通する特性であった。

6. 上のような特性が他の色聴所有者にも当てはまるか、今後多くの事例にあたっていきたい。

引用文献

- 1) 古矢千雪：音楽的知覚に関する研究 (VI)——色聴所有者の人となりと反応の分析——，広島文化女子短期大学紀要，1984，第17号，pp. 85～94.
- 2) 正木 正，依田 新 編：性格心理学，同文社，1935，pp. 268～282.
- 3) 桜林 仁，八木素子：Y-G 性格検査に現われた演奏型と創作型，日本心理学会第47回大会発表論文集，1983，p. 637.

Summary

This study is a continuation of the last study to analyze the phenomena of color hearing and the character of the color hearer using the life history and personality tests, Rorschach Test, MMPI, Y-G Test, MAS, GAT and CAS. The subject was a female student from a women's junior college who was selected from the preliminary inquiry.

The main results were as follows:

- 1) She could perceive the phenomena of color hearing in short music, but not in single tones.
- 2) She could not perceive the phenomena at any time. That is to say, mental elements worked on the perception of color hearing. This was similar to the result of the last study.
- 3) She reported that the experience of color hearing was something like looking into her mind with closed eyes, and there was the perception of distance and three-dimensional perception. But, this subject differed in the perception. She reported that she could see herself looking at something.
- 4) From the analysis of the tests and her life history, her characteristics were as follows: remembrance of emotional experiences impressed her in her childhood; having sensitivity; and having a small anxiety. This was similar to the result of the last study.